

暗闇くらやみの中にその顔が浮かんだとき、鮫島さめじまはマネキン人形がおかれているのだと思った。短い髪がぴったりと額やこめかみに張りついている。つんとした鼻筋と驚いたようにみひらかれた目は、マネキン人形の人工的な美しさを思わせるほど整っていた。

あたりは物音ひとつしなかった。闇の中にぼつんと浮かんだ顔を、誰だれもが息を殺し見つめている。

どこかで弦のかき鳴らされる音がした。それは琴でもなく琵琶びわでもなく、といってギターやチェロのような西洋的な楽器の音色ともちがっていた。ひどく耳障りで、しかも神経をひやりとさせるような暴力的な響きを伴っていた。

空中を横顔が動いた。闇はただの闇ではなく、今は濃密なうねりで満たされていた。ぴんと反そった白い指がそのうねりのひだを奏でるように揺れ動く。

今度はやさしい弦の音を、鮫島の耳は聞いた。

「それが近づいてきたとき、私たちの誰もが、言葉にだしてはつきりとはいいませんでしたが、くるものの正体をわかっていました。」

たとえるならば、それは季節の訪れと似ています。日々の暮らしの中で、確実に歩みを止めることなくやつてくるもの。そしてそれは決して立ち止まることもせず、私たちを呑のみこみ、やがておきざりにしていく。

あの長く苦しい戦役ののち、一族の多くの命が失われ、不自由な体となり、しかし決して忘れることもあきらめることもせず、待っていたときでした」

鮫島はそつと息を吐いた。声は凜れんとしていて、空気を裂くように伝わってくる。しかし言葉の内容よりも、空間とそこにある姿が、ひとつの幻を形づくっている。紡つむぎだされる言葉も、台詞せりふとして聞くのではなく、全体をつくりあげる装置のひとつとして選ばれているのだ。

「長老たちは毎朝顔をあわせるたびに、安心の表情を浮かべているのです。もうすぐやってくる。すぐ近くまでやってきていると、感じとっていたのだと思います。」

私たちの住む谷の東側に、大きな山があったことは先ほどお話ししました。陽が昇ると、その山の向こうから、それはもう突然に金色の光が射しかけてくるのです。その光が、冷たく暗い夜を吹きはらい、谷の生き物たちに呼びかけます。

目覚めよ！ 目覚めよ！

まばゆいばかりの金色の光に、鮫島は目を閉じた。溶けるようにその光の中に呑みこまれたシルエットから言葉だけが吐きだされた。

「私たちの目的は、生きること、そのものでした。畑をたがやし山羊やぎの世話をして、水を汲み、機はたを織る。太陽が西側の山に隠れるまでは、毎日毎日、畑をたがやし山羊の世話をして、水を汲み、機を織る……」

金色の光は序々に強まり、やがて朱色を帯び、そして薄れていった。鮫島の目は強烈な残像を留めたまま、暗黒に向けられる結果になった。

闇の中から声がいった。

「働く？ 私たちは働いているとは思わなかった。なぜならそれは生きることそのものだから。止めれば明日の糧が得られない。苦しいとかつらいとか、そんな気持をもつのは、誰かがそうしなさい、それが勤めなのだから、と呼びかけたとき。私たちは生きていたのです。

何も考えることはありませんでした。退屈なんて言葉は知らない。

だってそうでしょう？

私たちは生きることしか知らないのですもの——」

不意に、ごくわずかだが、その声に悪意の翳りが加わるのを鮫島は感じとった。声は、聞かぬ者の胸に宿った疑念を、確かに気づいている。

「そう。こんなことがありました。長老たちはきつと、私たちよりはるかに、訪れるものを待ち焦がれていたでしょう。ある晩のこと、村の真ん中にある松明の広場に集まっていたのです。

松明の広場には火が点つています。その火は、陽が西側の山に消え、そして東側の山の向こうから金色の光がやってくるまでは、決して消してはならないことになっていました。

松明の番をするのは、長老の役割でした。年老いた長老は、眠ったり起きたり、眠ったり起きたりしては、松明が決して消えることのないよう薪をくべているのです。

長老たちときたら、昼間でも、眠ったり起きたり、眠ったり起きたり……。それに私たちとちがって、夜の奥からやってくるものを恐がらない。

だから松明の番は、長老の役割と決まっていたのです」

かたわらでかすかに身じろぎする気配があった。鮫島がそちらに目を向けようとしたそのとき、ぼつと赤い光が正面に点つた。暖かな、やさしい光だった。

「その夜、松明の広場には三人の長老が集まっていました。陽が沈む前に夕食を終えてしまうと、ふだんなら眠くて眠くてたまらなくなる私たちなのですが、その夜だけは、長老が集まっているのを見て、何かがある、と感じていました。

松明を中心に長老たちがすわり、そしてそれを囲むように、ひとり、またひとりと、村の人たちが集まってきました。誰も何もいわないのに、その夜だけはいつもとちがうような気が、していたのです」

炎の向こう側に浮かぶ顔があたりを見回した。期待と、未知の何かに対する興奮がうかがわれた。

「気がつくつと、村人のほとんどが、松明の広場に集まっていました。

いつもとちがうこと。生きることだけでは無い何か。それともこれも生きることのひとつ？ でもこんなことは知らなかった。こんな気持を味わったのは初めて。私たちは、私たちより少し年上の、お兄さんやお姉さんの足もとにすわり、長老の顔と松明と、それからふり返ってお兄さんやお姉さんの顔と松明とを、かわりばんこに見て、胸がどきどきするのはなぜなのだろうと考えていました」

弦が鳴った。それは別の物語の幕開きを意味するもののように聞こえた。

赤い光の向こうに浮かんでいた、少年のような顔がおぼろになった。ゆっくりとした、これ5  
 まではちがう口調が語りかけた。

「森の奥からやってくるものを知っておるか。それも夜の森の奥からやってくるものだ。それ  
 が見えぬときは注意せねばならん。小さくてすばしこく、気がつくとお前たち誰の肩にもぶら  
 下がろうとする。奴らは言葉も喋らず、ものを食おうともせん。姿はまっ黒で、小さな頭に  
 細長い手足をもつとるんだ。多いときは何十という数になって、森の奥からやってくる。その  
 姿は、まるで踊っておるように見えるもんだ……」

ひんやりとした空気が背中からうなじにかけて這いあがつてくるのを鮫島は感じた。  
 「踊っておるように見えるのは、奴らが飛んだり跳ねたりして、黒い森のすきまから駆けだし  
 てくるときだ。まるで森の外にでられるのが嬉しくてたまらないように見える。」

だが奴らが本当に喜んでおるのは、わしらの誰かの背にぶら下がったときだ。まるで湧きで  
 るように森の奥からやってきて、わしらの間を跳ね回り、そしてすきを見て、肩に両方の手を  
 かけてぶら下がるのだ。ぶら下がられるのは、奴らの姿が見えているものばかりとは限らん。  
 したがって、背中にまっ黒い奴らの一匹がぶら下がっているにもかかわらず、何も気がつかん  
 者もおる。

それがどういふことだかわかるかな。自分では何も気づかず、明るくふるまっておる。だが  
 自分の姿を見た者たちは皆、顔を青ざめさせ、息を呑み、そして憐れみの表情を浮かべるの  
 だ……。自分だけがそれには気づいてはおらなんだのだ。

そして気がつく！」

この続きは、書籍でお楽しみください。

◎注意

本作品の全部または一部を無断で複製、転載、改竄、公衆送信するこ  
 と、および有償無償に拘らず、本データを第三者に譲渡することを禁  
 じます。

個人利用の目的以外での複製等の違法行為、もしくは第三者へ譲渡をし  
 ますと著作権法、その他関連法によって処罰されます。